

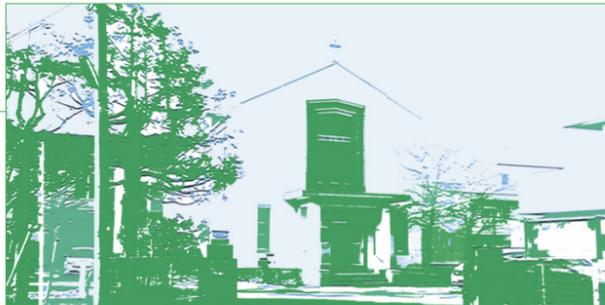


瀬田の丘

創刊 1973年

編集・発行／カトリック瀬田教会信徒会広報部
東京都世田谷区瀬田 4-16-1

ミサの時間：月曜日-土曜日 6:20am (「朝の祈り」に続いて)
日曜日 7:00am、8:30am、9:30am



地上最大の宝、ミサ聖祭

庄司 篤 神父

一九五五年八月上旬のある夕方、私はリジューの聖テレジアの伝記を読み終わった直後に、「もしキリスト教がこのような愛を生きさせてくれるのであれば、キリスト教を受け入れたい」と望みました。それから数日後、琵琶湖畔にある比良山に登り、約千メートルの頂上の炭焼き小屋に泊めてもらい、フランシスコの小さな花を読み、お盆明けの八月十七日か十八日頃、山を下りるときに決心しました。「もし神が存在されるのであれば、私はアッシジの聖フランシスコが創立した修道会で一生を過ごしたい。」そのとき、二十四歳でした。

九月一日から、京都の西院カトリック教会に通い始めました。この教会の図書室に色々の本があったので、次々と借りて読み、十月頃に、『地上最大の宝ミサ聖祭』という本を読み終わった時、「毎朝、ミサに参加して侍者をする」と決心し、勉強を毎週二回に増やしてもらいました。その年のクリスマスイヴに洗礼を受けたかったからです。そして、クリスマスイヴに洗礼と初聖体の恵みを頂きました。

初聖体拝領のとき、霊的な「火の玉」が体中をグルグル回っていると感じていました。この体験はその時だけです。これについて、フランスのアルスの教会の主任司祭、聖ヴィアンネが有名なカトリック要理の中で語っています。「聖体拝領のときに、霊的な火の玉が体中をグルグルと回っているのを感じない人は、哀れな人だ」と。以上、『地上最大の宝ミサ聖祭』という本を読んだお蔭で毎朝、侍者をするようになり、求道生活四ヶ月で洗礼の恵みを頂きました。『地上最大の宝ミサ聖祭』という本は、第二次世界大戦後の一九五〇年頃、一人の宣教師が執筆し、出版した本だったと思います。著者の名前を憶えていません。

受洗後、約三十七年後の一九九二年九月に、私の拙い訳でポルト・マウリチオの聖レオナルド著、『隠されている宝、ミサ聖祭』という本が出版されました。この本を訳していたときに、ハッと気づきました。「私が求道者時代に読んで感動した『地上最大の宝ミサ聖祭』は、聖レオナルドの著書、『隠されている宝、ミサ聖祭』に基づいて書かれ本だ」と。

何故なら、『地上最大の宝ミサ聖祭』の中で読んだ実話が、それより二世紀前に出版された『隠されている宝ミサ聖祭』の中でそっくりそのまま述べられていたからです。聖レオナルドは、一六七六年にイタリアのポルト・マウリチオで生まれ、一七五一年に帰天したフランシスコ会の聖人で、一九二三年にピオ十一世教皇によって『小教区黙想会の全説教者の保護の聖人』にされています。

『地上最大の宝ミサ聖祭』と『隠されている宝ミサ聖祭』のどちらにも書かれている実話を一つだけここに引用します。

.....

現代の偶像は『自分の利益』です。そして、ああ、どんなに多くの人が、その前にひれ伏し、この偶像に絶え間ない礼拝を捧げていることでしょう！ その帰結として、彼らはこれを追求して真の神を忘れ、悪の深淵に飛び込んでしまいます。

他方ダビデは、「主を求めざる者は、よきものに欠けることがない」(詩編 34・11) と言って、「何よりも先ず神を求める者は、いかなる災いにも遭わず、あらゆる善に富む」と断言します。

以上のことを、グッピオの三人の商人達の実例が明らかに示しています。彼らはシステルニエーノの町で催された見本市に商売に行きました。市が閉じられ、商品を片付け終わると、二人は帰る日時について話し始め、「明日、夕方までに家に帰れるよう、朝早く出発しよう」と決めました。

しかし、三人目の仲間が、「明日は日曜日だから、ミサ聖祭に与ってからでなければ、旅を始めることなど考えられない。ミサの後、軽い朝食を取り、満ち足りた心で出発したほうがよい。万一、夕方までにグッピオに帰れなくても、途中で気持ちの良い宿屋があるではないか」と言い張りました。

二人はこの勧めに従わず、「全能の神は、一度くらいミサに与らなくても、赦して下さるだろう」と答えました。そして日曜日の夜明け前に、教会にも入らず、馬に乗って家路に向かい、コルフォーネ河の岸にたどり着きました。河は昨夜の豪雨でひどく増水し、木の橋は濁流に洗われて揺れ動き、危険な状態でした。彼らが馬に乗って橋の上を進み、真ん中あたりに来ると、大きい波のうねりが橋を打ち壊し、完全に押し流してしまいました。

勿論、二人の哀れな商人は、馬もろとも河に落ちて溺れ死に、同時に、お金も、商品も、そしてほぼ確実に靈魂まで失ってしまいました。橋の崩れ落ちる音聞き、惨事に気付いて、村人達はその場に駆け付け、鉤で溺死体を引き上げ、堤の上に横たえました。出来れば、二人の身元が分かって埋葬されるようにするためでした。

「主日のミサに与りなさい」という掟を守り、喜びに溢れてやって来た三番目の商人は、間もなく河岸にたどり着き、堤の上の二人の遺体を見ました。よく見るために近づき、すぐさま二人の仲間だと認めました。そして居合わせた人々から悲惨な出来事の一部始終を、深く悲しみながら聞きました。

それから両手を天に上げ、自分をこれほど憐れみ深く守って下さったいと高きお方に感謝し、聖なる生贄に参加した時間を繰り返し賛美しました。自分が守られた原因をはっきりと認めたからです。

家に着くと、悲しいニュースを告げ、亡くなった二人が手厚く葬られるよう、その家族に連絡しました。こうして、すべての人の心に《主日に、ミサ聖祭に与ろう》という生き生きした望みを引き起こしました。

.....

ミサとご聖体の偉大さ、素晴らしさについて

○全世界のカトリック教会の祭壇上で行われるミサと、約二千年前にゴルゴタの十字架上で献げられた生贄は、本質的に且つ最高度に同じです。

○違いはただ、次のとおり。

十字架上の生贄は、流血を伴い、一度限りで、世界の全ての罪(世の初めから世の終りまでの全ての罪)の贖いを完全に成し遂げた。

祭壇上の生贄は、無血で、何回でも繰り返され、ゴルゴタの丘のあの普遍的な贖いを、個々の人と場合に適用するために制定された。

ですから、十字架上の生贄は罪の贖いの手段であり、無血の生贄はその罪の贖いを我々のものとするのです。

つまり、十字架上の生贄は主キリストの無限の功徳の宝庫を整え、ミサはその宝庫を実際に利用させてくれるのです。

○ミサの中で、贖い主の御受難と御死去の象徴が行われるのではなく、ゴルゴタで執り行われた、いと聖なる業と全く同じものが、真実な意味において聖体の秘跡を通して祭壇上で再び新たにされるのです。一つ一つのミサにおいて、私達の贖い主は我々のために、実際に死ぬことなく、神秘的に死ぬために、つまり現実に生きておられ、しかも同時に屠られたような者となるために戻って来られるのだと、全き真理をもって言えます。——「私は屠られたような小羊が立っているのを見た」(黙示録 5・6)。

○ミサと御聖体の卓越性は、次の三つのことに存します。『人となられた神』が大祭司として、御自分の神秘体のメンバー達と共にミサの中で、御自分の体と血・靈魂と神性を罪の贖いのために、父である神に捧げて下さる。つまり、

- ①捧げる大祭司は、神人イエス・キリスト。
- ②捧げられる生贄は、主イエスの御体と御血・御靈魂と神性。
- ③捧げ物を人類の罪の贖いとして受け取られるのは父である神。

○御聖体は永遠の命の糧です。「私の肉を食べ、私の血を飲む者は永遠の命を得、私はその人を終りの日に復活させる」(ヨハネ 6・54)。